
靈幻彼氏

南 晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

靈幻彼氏

【Zコード】

Z8925Z

【作者名】

南 晶

【あらすじ】

クリスマスイブに恵理が電話で呼び出した元カレ、孝之。イケてる外見に合わせず頑固で一途だった孝之を10年前に捨てたのは自分だった。

イブの夜に孝之と再会し夜を共にした恵理は、別れた事を後悔するが、時既に遅し。

孝之は3年前に死んでいたのだった。

前に書きました短編『クリスマス・イブ』の続編です。

1 (前書き)

季節限定で書きました短編『クリスマス・プレゼント』の続編です。
宜しければ、そちらもご覧下さこま。

「いらっしゃいませ～！恋人にチョコレートはいかがですか～！？」

時は寒さ本番の1月末。

地元の百貨店の入り口で、あたしは寒さに震えながらワゴンに入ったチョコレートを売りつけようと、声を枯らしていた。

たった2ヶ月前まで大阪で出版社に勤務していたあたしが、何故、田舎の百貨店でバレンタイン商戦のアルバイトをしているのか。答えは簡単。

会社が倒産したからだ。

結局、あたしは仕事が失業した今、大阪で一人暮らしをしている理由がなくなつて、実家に帰つてしまつたのだ。

失業保険が出ている間は、定職に就く訳にはいかないので、こうやつてスポット的なアルバイトを職安で斡旋してもらつては日当を稼いでいる毎日だった。

今までの貯金があるのと、実家にいるのとで、差し迫つて生活費に困るわけではないが、35歳の独身女性がいつまでもこの状況ではマズイと自覚はしていた。だからと書いて、この年になつていきなり正社員の仕事は見つかる筈もない。

今の所は就職活動をしながら遊んでいるよりはマシなこのアルバイトを2月14日まで入れてしまつたのだった。

「松本さん、メチャクチャ寒いですね～！あたし、もう凍え死ぬかも～」

一緒にバイトに入っている女子大生の鈴木裕香ちゃんがガタガタ震

えながら、手を擦り合わせて泣き声を上げた。

「頑張るのよ！今日は6時まででいいって、チーフも言つてたし」「え～、まだ3時なのにですか～？まだ3時間もここにいろつて事～・・・つてか、バレンタインまでまだ2週間もあるのに、売れるわけないですよ～」

「売れないと思つけど、他の店が売り始めてる以上、やらない訳にはいかないんでしょ。そのお陰で雇つてもらつてんだから、文句言えないじゃない」

「せりや～そ～ですけど～・・・外でやる必要は全くないですよね

」

それにはあたしも同感だった。

ただでさえ風の強い海沿いのこの街で、真冬に外でチョココレートを売るなんて狂気の沙汰だ。

激安家電店にいるネット回線会社のキャッチ部隊のような、ペラペラのウインドブレーカーが制服として配給されているが、この強風の中ではあまり意味をなしていない。

道行く客も、ワゴンの中をチラリと一瞥するだけで、さつさと歩き去っていく。

何時間もここに立っているのに、あたしから買つてくれた男性はまだ一人しかいなかつた。

思い出すのも困難な冴えない風貌の中年男だったが、あたしがあまりにしつこく押し付けたものだから、同情で買つてくれたようなものだ。

あたし達は、あたかも『マッチ売りの少女』のよう、「チョコはいいませんか～」とか細い声で叫び続けた。

長い間、一人暮らしだつたあたしが、この街に戻ってきたのには、

ちょっとした理由があった。

収入が無くなつて生活できなくなつたのは勿論なのだが、クリスマスに起こつた不思議な体験が、あたしをこの街に留まらせていた。

クリスマスイブの夜、コタツの中で酒を飲んで酔つ払つていたあたしは、突然、10年前に別れた（厳密に言えばあたしが捨てた）元カレ、井沢孝之に電話する事を思いついた。

10年も前のケータイ番号がまさか繋がるとは思つていなかつたのだが、何と孝之は電話に出た。

その時、家に誰もいなかつたのをいいことに、あたしは彼を呼び出し、話をして、そして10年ぶりに体を重ねた。

問題はその後だつた。

彼に再び逢おうと日論んで出かけた同窓会で、孝之は3年前に交通事故で死んでいる事を聞かされたのだ。

悲しむどころではなかつた。

驚きのあまり、あたしは只々、呆然としていた。

あれは幽霊だつたのか。

もしくは、酔つ払つたあたしが見ていた夢だつたのか・・・。

でも、あたしは確かに彼とやる事はやつた。

彼の滑らかな筋肉質の肌の感触まで、まだはつきりと思い出せる。真相は分からぬまま、あたしは何度も彼に再会しようとケータイに電話をしてみた。

だが、一度は繋がつた筈のケータイからは、「お掛けになつた電話番号は現在使われておりません」という、お馴染みのアナウンスが流れるのみだつた。

それから、彼の事が気になつて、あたしは仕事が決まるまでは、彼が生きていたこの街に留まる決意をした。

何故つて・・・。

あたしは気付いてしまったのだ。
彼と別れて後悔していた事を・・・。

天然の茶髪に色素の薄い琥珀色の瞳。

陸上部で鍛えた長い筋肉質の手足。

スラリとした長身は完全にモデル体型で、遠くからでも人目を引いた。

そんなイケメンをあたしは10年前、つまり25才に時にフツてしまつたのだ。

彼はチャライ外見に似合わず、真面目で几帳面で、しかも口が悪くて、乱暴で、融通が利かなかつた。

昭和のオヤジかというくらい、頑固一徹、そして、優しい人だつたのだ。

そして、あたしは彼に反して、いい加減で移り氣で、所謂、八方美人な人間だつた。

今、思えば、相反するあたし達だから、お互い好きになつたのかも知れない。

人は自分にないものを見るのだから。

でも、一途な彼は、時にあたしを束縛した。

まだ、若さを持て余していたあたしは、彼とこの街で一生を終える事は考えられなくつて、彼が結婚を口にし出した時、別れを告げたのだ。

結婚つてホントにタイミングの問題なんだと思つ。

今、35歳で切羽詰つてあたしなら、二つ返事でOKしただらうに。

今更、後悔しても遅過ぎる。

何と言つても、彼は3年前にもう死んでいるのだ。

あのクリスマスイブの不思議体験は、神様がくれたトキメキのプレゼントだったんだろう。

でなければ、実はあたしを恨んでる孝之の幽霊だ。

どちらでもいい。

あたしはもう少しの間、彼との思い出が残るこの街に留まりたかった。

「ねえ、松本さん、幽霊って信じます〜！？」

ほんやりと孝之の事を回想していたあたしは、突然、タイムリーな質問をされて飛び上がった。

まさか、あたしが靈の事を考えていたとは思わない裕香ちゃんが、ワゴンの反対側から手に息をハーハー掛けながらこっちを見ている。「な、なんで！？へんな事言わないでよ。気持ち悪いじゃん」「でしょー！？でも、この百貨店の裏に商店街のアーケードがあるじゃないですか）。そこに怪しげなカフェができるんですよ。占いカフェって言って、死んだ人ともお話をさせてくれるんだって。メチャ、胡散臭くないですか～？」

・・・胡散臭い。

でも、その時、藁をも掴む心境だったあたしの胸はドキン！と鳴つたのだ。

女ってホントにバカだと思ひ。

占いとか、おまじないとか、幽霊とか、科学的根拠がないものに何故、惹かれてしまうのだろう。

最近流行らしい天然石の数珠を何重にも腕に巻きつけてる女性客。朝「今日の占い」をテレビで見て、「最下位は乙女座のアナタ」と言われてマジくこんでるあたしの母親。かく言うあたしも「今日のラッキーアイテムはピンク!」と聞いたら、ピンクのハンカチを持つていつてしまう。

幽靈もまたしかしり。

イケメンだったにも拘らず、一途過ぎる性格がウザイと思っていた孝之が、死んだ途端に美しい思い出になる。

幽靈になつたと思った途端に、神聖視してしまつのだらうか。

実を言えば、孝之に再会する為、恐山まで行つてイタコに降靈してもらひ事まで考えていたのだ。

それが、ここから500m離れたアーケード内の占いカフェで、コーヒー飲みながら、靈と話せる。

サファリパークじゃないんだから、あちこちに靈がウロウロしている訳ではないだろうが、青森県まで行く手間暇を考えたら、ずっと効率的だ。

嘘だつたとしても、コーヒー飲んで帰つてくれればいいんだから、スタバに行くよりは有意義だらう。

行つても損はなさそうだ。

そう考へて、あたしはバイトが終わったその夜、裕香ちゃんと占い
カフェ「ロザリオ」のドアを叩いたのだ。

占いカフェ「ロザリオ」と書かれたアンティークな雰囲気の木製の
看板が、同じく重厚な木製のドアに掛かつたまま、風に煽られ、ガ
ツタン、ガツタン音を立てている。

外壁だけ、と言うより見える部分だけレンガが張つてある壁にはワ
ザとらしく薦が絡まつていて、年季が入つていて、年季が入つていて、
年季が入つていて、年季が入つていて、年季が入つていて、年季が入つて
いる。

最近、オープンしたばかりなのに、薦が絡まるとは、自作自演も甚
だしい。

しかも、アンティークなのはその店だけで、右隣は自転車屋、左隣
は乾物屋という昭和の趣だ。

あたし達は並んで、アンバランスな和洋折衷の雰囲気のドアを開け
た。

中は薄暗くて、光源が全く入らないように、にカーテンが引かれて
いる。

オルゴールミュージックが静かに鳴つていて、キャンドルライトに
ボンヤリと照らされた店内は幻想的な雰囲気だ。

壁に建て付けられた棚の上には、かわいいコーヒー カップや、ガラスのグラスがズラリと並んで、耐震対策は全く考えられていない。

入り口付近に丸テーブルが一つ、そして半円形のカウンターが中央にドンとあって、その周りを囲むように椅子が並んでいる。

その構造から、この店の前はスナックだった事が窺える。

カウンターの中央には、一人の男性が立っていた。

少女マンガでよく見る執事のような服装に、髪をオールバックにしている。

シャープな輪郭に東洋的な切れ長の目。

間違いなく、執事をイメージしたコスプレだ。

イケメンの部類に入ることは間違いない、イタゴさんよりは目の保養になるかもしれない。

「お帰りなさいませ、お嬢様方」

執事はニッコリ笑つてそう言つと優雅な仕草で、カウンターの前に並んだ椅子に手を差し出した。

ここに座れという事らしい。

「やつだあ！こいつて執事カフェでしたつけ？お嬢様つて、なんかウケルんですけど～」

さすが女子大生。

若さの力で順応してしまった裕香ちゃんが、キャピキャピしながらあたしを残して椅子に座つた。

あたしも慌ててその後を追い、彼女の隣に腰掛けた。

「執事もしますが、勿論、占いもできますよ。いつでもお問い合わせ下さい」としてます。お飲み物は何になさいますか？」

そつがない笑顔で、彼は笑うと差別しないように、あたしにも問い合わせてくれた。

少し高めの良くなれる声。

その声と凛とした清楚な佇まいに、教会の牧師さんみたいな印象を受ける。

「あ、じゃあ、カフェオレをお願いします。」

「えー！松本さん、飲みましょうよ。ねえ、こ、アルコールもあるんでしょ？」

「いざりますよ。お車でなければ

・・・車で来てるし。

そう思つたけど、このお気楽大学生は帰りの事など考えてもないようだ。

大方、あたしに送らせるつもりなんだろうけど。

結局、あたしにはカフェオレ、裕香ちゃんにはカクテルを執事は用意した。

「今日は占いを御所望ですか、お嬢様方？」

コーヒーを口にしながら、まだ店内をキョロキョロしているあたし達に執事は声を掛ける。

そうだ、本命はそれだった。

イケメンを至近距離で見ただけでも今日の収穫は大きかつたけど、あくまで目的は孝之だ。

あたしがオズオズと口を開いたとしたその時、横から裕香ちゃんが

先に口を挟んだ。

「あたし〜、彼氏欲しいんですけど〜、どうやつたらできますかあ
〜？」

・・・んな事、自分で考えらつつーの一

思わず出そうになつたツツコミを、あたしは必死で胸に収める。
彼女だけ、それなりに必死なことには違ひない。
あたしより、時間的に余裕があるだけで。

執事はニッコリと笑いながら、ボードの上に置いてあるソフトボーリくらいの水晶玉をカウンターに持ってきた。
小さな赤い座布団の上に載つた透明無地の球はあたしが顔を寄せる
と微妙に色を変える。

神秘アイテムナンバーワンだ。

彼は白い長い指で水晶球の周りにクルクル円を描いた。
そして、裕香ちゃんの顔とその反射した影の歪み具合を見比べて、
「今年、運命の出会いがあります」と自信有り気に答えた。

「え〜！つそれって、もしかして、店長さんの事じゃないですか〜！？今日つて運命の日〜！？店長さんつておいくつ〜？」
「あなたより年上なのは確かですね。僕はもう若くないですよ、お嬢様。」

彼は軽く裕香ちゃんをあしらひ、あたしに向かつてワインクした。

・・・そのワインク、どういう意味だ！？
あたしと同類なのをアピールしたいのか！？

複雑な気分で、あたしはカフェオレを啜る。

彼はあたしをしばらく眺めていた。

イケメンの悩ましげな視線が痛くて、あたしは思わず赤面して上目遣いに彼を睨む。

「・・・なんですか？あたしの顔に何かついてます？」

「・・・はい、あなたには靈がついてますよ。それもかなり強い、

ね

「・・・え！？」

あたしを見つめていたと思つていた執事の視線は、あたしを通り越して何もない壁を睨んでいる。

あたかも、あたしの後ろに誰かがいるように。

あたしは、見えないものを見ている執事の視線の先を、恐る恐る振り返った。

「やつだああ！何ソレ！？松本さん、憑り付かれてるんですかあ？」

カクテルを吹き出しながら、「冗談かと思つた裕香ちゃんが茶化して叫んだ。

あたしも思わず、後ろを振り返つてキヨロキヨロ見回す。
勿論、そこにいるのは孝之じやないのかつて思つたからだ。

執事はジッと何も無い壁を睨んで続けた。

「その靈はあなたに強い恨みを持つています。男性です。かなり強い靈力だ・・・このままでは、あなたに靈障が起る・・・あなた、早くこの土地を離れた方がいいですよ・・・」

「ええ～！あたし、失業して年末にこっちに来たばかりなんですけど！？」

「そんな事より、命が大事でしょ？できるだけ早く引っ越すべきです・・・一度、御祓いした方がいいかもしませんね。今、ここで予約されれば20%オフになりますが・・・」

「はー？20%オフって、御祓いの代金！？」

「勿論、こちらも商売ですから。御祓いの通常価格3万円ですが、今回は初回キャンペーンも同時に使えます。最大30%オフ！これはお得ですよ。」

「松本さんーやつたほつがいいですよー！男運悪いのも直るかも～」

ふざけんなーと言いかけた所に、裕香ちゃんまでが合いの手を入れ

る。

キレたあたしはカバンを掴んで立ち上がった。

「結構です！そんなのインチキに決まってるじゃない。靈感商法もいいとこだわ！もう帰ります！お勘定は！？」

「はい、カフェオレ800円になります。」

カフェオレが800円！？

ラーメン食べた方がマシじゃん！？

にこやかに返事をする執事に、あたしは更に囁み付いた。

「ちょっと！なんでカフェオレが800円なの！？スタバより高いじゃん！ってか、ラーメン食べれるし！」

「テーブルチャージが含まれておりますので、若干高めの設定になつております。靈視の料金は今回はサービスさせて頂いてありますよ。」

「何が靈視よ！信じられない！もうここわよー釣りはいらぬから！」

あたしは1000円札をバン！とカウンターの上に置いて、荒々しく店を出た。

憤慨しながら家に辿り着いたあたしは、まずはお清めとばかりにバスルームに直行した。

シャワーの蛇口を捻つて、お湯を頭から滝のように浴びる。修行僧の如く、あたしはしばしシャワーに打たれていた。

ムカツク！
ムカツクつたらムカツク！

どーしてあたしが孝之に恨まれなきゃなんないのよ。
そりや、付き合ってた時はないがしろにしてきたし、あまり近くす
タイプの彼女じゃなかつたかもしない。

でも、高校の時から付き合い始めて、別れるまで8年も一緒にいた
んだもん。

付き合い長すぎて、夫婦のような馴れ合いの関係だったから、遠慮
なく好きな事言つてたかもしない。

結局、長過ぎた春が倦怠期と重なつて、刺激が欲しくなつたあたし
が別れを切り出したんだけど。

孝之はもしかして、死んでも死に切れない程、あたしの事恨んでた
のかなあ・・・。

だったら、あのクリスマスイブの事はやっぱりあたしの夢だつたん
だろうか。

熱いシャワーを浴びながら、あたしの田から涙がポロポロ零れてき
た。

さつきのイケメン占い師は、あたしからふんだくる為に、見えても
ないクセにテキトーな事を言つたかもしない。

でも、心当たりがあるあたしには、その言葉が重く圧し掛かってき
た。

・・・また、会いたい。

本当は怒つてるの?つて、聞いてみたい。

もし恨んでるなら、一言、ゴメンネって言いたい。

そうでなければ、あたしだつて死んでも死に切れない。

そう思つたあたしは、タオルを掴んで、バスルームから飛び出した。

「えーっと、ビールと安物のワインと、確かスルメイカがあつたっけ・・・。そして、コタツの上には蜜柑・・・と。」

自分の部屋に戻つたあたしは、記憶の糸を手繰り寄せながら、あのクリスマスイブの夜を再現しようと試みていた。

そう、確かに、テレビを一人で見ながら、ビール飲んで酔つ払つてて・・・。

その後、ケータイから電話したんだっけ。

テレビをつけて、スルメイカを齧りながら、あたしは缶ビールを開けて一気に飲み干した。

酔い加減はこのくらいだつたかな・・・？

いや、あの時はもつと飲んでたかも。

そもそもが酔つていたので、当時の記憶は更に曖昧なものになつていた。

記憶を手繰りながら、あたしは景気付けに更にビールを開ける。そして3本くらい飲み干した後、ようやく眩暈を感じたあたしは、コタツに入つたままゴロンと仰向けになつた。

そうだ、ケータイ、ケータイ・・・。

お願い、電話に出て、孝之・・・。

あたしは酔いで震える手にケータイを握つて、アドレスをスクロー

ルした。

まだ消えていない井沢孝之の名前。
ドキドキしながら、あたしが発信ボタンを押そうとしたその時。

パン！

大きな破裂音がして、突然、部屋の電気が消えた。

一瞬にして暗闇となつたあたしの目の前で、ケータイ画面だけが光源になつて、何とか周りが見える状態だ。

さつきまで付けていたテレビも同時に消えてしまったので、部屋は静寂に包まれる。

ブレーカーが落ちたんだろうか・・・？

あたしが酔いの回った体を起こそうとしたその時、体の動きが突然奪われた。

何かに押さえつけられているような、体の上にモノが載っているような、すごい重圧感だ。

あたしは仰向けのまま床にべたつと押し付けられた。

こ、これって・・・噂の金縛り・・・？

動かない体の中で唯一動いた目をキョロキョロさせて、あたしは部屋を見回す。

誰もない筈の小さなあたしの部屋。

部屋の隅に置いてあるシングルベッドの上に、あたしは信じられないものを見た。

両足を抱えて座っている人があたしを睨んでいる。

暗い影のようなその人は、シルエットから男性である事が分かつた。あたしと視線が合うと、その影はゆっくり立ち上がり、こちらにスー
ーっと向かってくる。

歩いている感じはない。

足にローラースケートがついているように、ブレる事なく影は真つ直ぐあたしの方に近付いてきた。

・・・だ、誰！？孝之なの！？孝之！？

影はあたしの体の上までスーっと載つてくると、首に手をかけた。覆い被さつてくるその影の顔を、あたしは硬直したまま凝視するが、誰かといつ判別ができない。

怖いのに視線を逸らすことも適わなかつた。

「・・・・・」

首に掛かる手があたしの首をグッと締め付け、あたしは息を呑む。

恐怖と酸欠で抵抗する事ができない。

目の前がゆつくつと暗くなつていつて、あたしは、そのまま意識を手放した。

「松本さん、ひどいですよ。昨日、あたし、飲んじゃつたから一人でタクシーで帰ったんですよ。もひ、何で急に帰っちゃつたんですか？」

一日酔いの頭に、ノリノリ女子大生の甘つたるい声は脳味噌をえぐられるようだ。

蛍光ピンクのウインドブレーカーに身を包んだあたしは、古賀店の前のワゴンの前で道行く人々をボンヤリ眺めていた。

昨夜の恐怖の心霊体験のせいで、仕事するという心境では全くなかつたが、バレンタインまで後2週間を切つている。

今日休んだら、会社もバイトを補充するのが大変だろう。

そう思つて、悪夢の一夜が明けてから、あたしは取り合えず外傷がない事を確認した。

一日酔いの体に「ウゴンの力」を注入して、何とかバイトに来たのだ。

社会人生活が長いと、会社の都合まで考えてしまつ、我ながら殊勝な心意氣だ。

それに免じて正規採用してくれれば、もつといいのだけど。

「当り前でしょ！？あの店、絶対怪しいし。なんだかんだ言って、御祓い代やら、壺やら、数珠やら、売りつける気なのよ。大体、何であたしが靈の恨みを買わなきやなんない訳？」

ワゴンを挟んだ反対側にいる裕香ちゃんに、あたしは反撃する。

そうだ、靈（しかも男の！）に恨みを買う覚えなどない。

あるとすれば、生前、邪険に扱ってきた孝之くらいだけど、昨夜のあの影が孝之だったのかどうかは確信がなかつた。

・・・孝之とこ「りは、そつ・・・。

もつと暗くて地味な感じの、執念深い人・・・。

そこまで考えて、あたしは金縛りや首を絞められた感触を思い出してゾッと鳥肌が立つた。

「でもお、あのイケメン占い師の人、靈が見えるんですって。それに、松本さんが男の人に恨みを買つて、あたしは分かる氣するなあ」

ニヤニヤしながら、裕香ちゃんは聞き捨てならない事をのたまつ。あたしは田を剥いて、ワゴンの後ろの彼女を睨みつけた。

「それ、ビーゆー意味よ！？何で、あたしが男の恨み買つの！？」
「だってえ、松本さん、天然じゃないですか。結構かわいいのに、鈍いつていうか。思わせ振りな態度をしどいてから、そんな気ありませんでした、みたいな？勘違いさせひやつ罪な女つて感じですかね」

「いつ、あたしが思わせ振りな態度したのよ？」

「だから、松本さんは無意識にそういうのやつちやつんですよ。だから、男は勝手に勘違いして、自滅するんですね。」

あたしは、考え込んでしまった。

自分が八方美人でいい加減な性格なのは自覚していたので、裕香ちゃんの言葉にも思い当たるフシがない事もない。

ただ、生きてる男ならともかく、靈に恨みを買つほどではないと思う。

「でもお、これっていう意味ですよ。松本さんの近くって、なん

か暖かくて、明るい感じがするんですよね~。非モテ男は、明かりに群がる蛾みたいに吸い寄せられちゃうんじゃないのかな~」

取り繕うつもりなのか、裕香ちゃんは褒めてるのか、貶してるのか微妙な「メントをする。

その気持ちはあるがたいけど、生憎、非モテ男もモテ男も、あたしの周りには飛んで来る気配がない。

・・・もう一度、あの店に行つてみよ~。

インチキ占い師を信じていた訳では全くない。
でも、昨夜の不思議体験を誰かに聞いて欲しくて、あたしは唐突にそう思った。

恨みどころか殺意まで感じた昨日のあの影。

あれは孝之じゃないって、誰かに言つて貰いたかったのだ。

『占いカフェ ロザリオ』は昨日と同じように、自転車屋と乾物屋に挟まれてアンバランスなアンティークな雰囲気を醸し出していた。今日は裕香ちゃんは合コンだとかで、バイトが終わるとじゅうせと帰つてしまつたものだから、あたしは一人で店の前に立ち尽くしていった。

月が出ているせいで、店の前はボンヤリと明るく、開店したばかりなのに古びた看板がはつきり見える。

その扉を見つめて、入ろうか、入らまいか、しばらく考えていた矢先、突然、中から扉がバーンと開いた。

「キャー！」めんなさい…

3人の制服姿の女子高生がキャピキャピ騒ぎながら、外に飛び出してきて、あたしは思わず後ずさる。何の悩みもなさそくなテンショソの顔だつたけど、ここに来たという事は何か悩みがあるんだろう。

そうでなければ怖いもの見たさか、イケメン執事を観賞しに来たか。あたしは、もう中に客がないのを確認してから、恐る恐る足を踏み入れた。

「お帰りなさいませ、お嬢様。」

店内の正面に設置されたカウンターの中で、昨日の執事はにこやかに声を掛けた。

昨日と同じオールバックにした艶のある黒髪に切れ長の目。自分がイケてるのを自覚した上で、なんかの少女漫画に出てくる執事の「コスプレ」している。よほどのナルシストか、そうでなければ、かなり残念なマンガオタクだ。

あたしは警戒しながら、そろりとカウンターの椅子にお尻を載せた。カフエオレ800円は仕方ないにしても、御祓いをこの「コスプレ」執事にお願いする気はなかった。

たとえ、それが最大30%オフで、21000円に値下がりしても、だ。

そもそも、孝之に会いに来たのだから、祓われては本末転倒というものだらう。

追い詰められた小動物みたいに固くなっているあたしを、執事は苦

笑して見つめた。

「そんなに怖がらなくとも、僕は押し売りはしませんよ。昨日言つた事、もし、気にしてらつしゃつたら、申し訳ございません。ただ、僕は本当に見えてしまう体質なんです。」

「・・・本当なのは分かつてます。あたし、昨日、靈に襲われたんです。金縛りにもあつて・・・」

ああ・・・と何故か納得した顔で、執事は切れ長の目を細めた。

「では、あなたはまだ気が付いてなかつたんですね。これは失礼しました。」

「・・・? 何をですか?」

カウンターに頬杖ついているあたしの顔を見て、彼はにこやかに恐ろしい事を言った。

「あなたも僕と同じ、『見える』体質なんですよ。」

あたしに靈が見える！？

いや、見えてないけど。

そんなの今まで見た事ない。

見えるどころか、子供の頃、お盆にやつてた「あなたの知らない世界」特集を見て、震え上がってた側の人間だ。

見たとすれば、クリスマスイブに現われた孝之くらいだけど、あれは幽靈というには微妙な感じだ。

寧ろ、見えないから、こんなとこまで800円のカフェオレ飲む覚悟で来たんじゃない。

何を言われているのか分からず、あたしは眉間に皺寄せて執事を見た。

あたしの反応を見て、彼は可笑しそうに笑う。

「あなたはにきつと人間か幽靈かの判別つかない位にハツキリ見えているんですよ。今まで会った人の中には、本物の靈もいたはずです。靈だと気が付かなかつただけで。会った人が実は亡くなつてたなんて体験、今までありませんでしたか？」

「・・・あ、ある・・・かも」

それは、ある。

会つたどころかエッチました、3年前から死んでる孝之の顔がすぐ頭に浮かんで、執事の言葉の意味をあたしはやつと理解した。

リアル過ぎたあのクリスマスイブの夜。

電話で呼び出し、ハツチまでした孝之がまさか死んでるなんて夢にも思わなかつた。

いや、寧ろ、夢だつたんだと思つていた。

執事の言つ事が本当なら、やつぱり孝之はリアルな幽靈だつたのか・・・。

人間×幽靈の奇跡の異種交配は、靈感の強いあたしだから実現したケースなんだろうか？

「でも、昨日のあの心靈体験は！？アレ、完全に悪靈入つてたし！あたし、生まれて初めて金縛りとか体験しちやつたんですけど」「それは、その靈があなたより強くて、意図的に攻撃してきたんでしょう。惡意のない浮幽靈は素通りしていくますからね。その場合、普通の人には見えない靈が、あなたにはハツキリ見え過ぎて、人が靈か区別がつかないんですよ。」

「・・・はあ。じゃ、昨日のはやつぱり、あたしを恨んでる孝之だつたつて事？」

「違うと思います。孝之さんが誰かは知りませんが、その靈は今、ここにいますから」

その言葉に、あたしはギョッとして執事の視線の先を見た。

鷹揚な口調とは裏腹に、カウンター越しに立つてゐる執事の表情は険しくなつていた。

筆で描いた様な眉の下の細められていた切れ長の目が鋭くなり、形のいい薄い唇がギュッと噛み締められる。

彼が見据えるその方向から、冷凍庫を開いた時のような冷氣がスーっと漂つてくるのを肌で感じた。

尋常でない執事の形相と得体の知れない冷氣に、あたしの背中がゾッと寒くなる。

「な、何ですか？執事さん、何、見てんのよ？」

「・・・昨日からあなたに憑いている靈ですよ。今、そこにはいます。昨日は大人しくしてくれましたが、今日はそういう訳にもいかないみたいですよ。あなた、なんか男を泣かす事しました？」

「しつ失礼ね！人聞き悪い事言わないで下さい！泣かすどころか、最近、男の子と話なんてした事ありません。ナンパもされてません！」

「でも、あなたに弄ばれたって言つてますよ？」

「ブツ！な、何ですか、それ！？そんな事できたのは20代までです！30代になってからは、声も掛けてもらえません！」

あたし達が掛け合い漫才をしている間に、執事の視線の先の壁からうつすらと白い靄のようなものが湧き上がってきた。
靄は次第に濃くなり、煙のように立ち昇りながら、自らを形作っていく。

あたしは驚異の現象に口をあんぐり開けて、硬直していた。
やがて、白い煙は天井に向かつて巻き上がると、そこには立ちぬくす一人の男性の姿が現われた。

小柄で小太りな眼鏡をかけた30代くらいの男だ。

「けいおん！」と書かれた萌え系アニメがプリントされているダサダサトレーナーは、ジーパンの中に入つてベルトで締められている。背中には何故かリュックを背負つていて、ウルトラマンのフィギアのストラップがジャラジャラぶら下っている。

髪はかなり後退しており、禿げ上がった額と背中に伸ばした長髪のせいで、まるで平家の落ち武者だ。

アキバとか大須とかの電気街に必ずいるこのタイプの男性。
あたしの友達には絶対にいないと断言できる。

でも、どこかで見たような・・・？

硬直している脳味噌をフル回転させて、あたしは必死に思い出そうと試みた。

その時、男の靈は俯いていた顔をゆっくりと上げた。

あたしを真っ直ぐに見つめる眼鏡の奥の瞳がギラリと光って、ポテつとした丸い顔が歪んでニヤリと笑った。

途端に、笑った唇の端からボタボタッと血が滴る。

「ひ、ひええええーーーー！」

あたしは恐ろしさのあまり、悲鳴を上げながらカウンターの上によじ登つて、執事が立っている内側に飛び込んだ。

「執事さんーーあ、あんな人、知り合いにいませんけどーー? 誰なの? ってか、何、あの無駄にリアルなオタクスタイル!」

執事にしがみ付きながら、あたしはパニックになつてキンキン声で叫んだ。

「僕が知る筈ないでしょう。でも、彼はあなたを知っていますよ。弄ばれたつて怒りますからね。」

執事は目の前で起つた超現象に驚いた様子もなく、淡々と話をする。一応、拌み屋やってるんだから、こんなのが見ると慣れているんだろうか。

靈とは思えないリアルな動きで、オタク男はゆっくりと歩いてカウンターの方に近付いて来る。

足は両方ついてて左右交互に動かしているが、足音は昨日と同じく

全くしない。

唇から滴る血だけがリアリティを持つて、歩く度にポタツポタツと滴り落ちた。

「し、執事さん！御祓いお願ひします！通常料金3万円から30%オフで！支払いはバイトの給料日の25日でいいですか！？もしくは失業保険の下りる来月15日で！？とか、早く何とかしてください！！！」

パニックになつたあたしは支離滅裂な事を喚きながら、執事に抱きついてガクガクと揺さぶつた。

なのに、彼は前を見つめたまま返事もしない。

「ちよつとー？執事さん、聞いてんのー？ねえつてば・・・・・？」

彼は返事をすることなく、揺さぶるあたしの力に押されるようにぐらっと傾き、カウンターの下に崩れ落ちた。

「あやあああーちよつとおーどーしちゃったのー？？」

びっくりしたあたしは、ぐつたりと蹲るような姿勢で倒れている執事の背中に追い縋つた。

その時を待つていたかのように、彼の両手があたしの両足をグッと掴んだ。

その勢いであたしはひっくり返され、カウンターの下で尻餅をつく。

「キヤー！な、執事さん・・・・！」

そこまで言いかけて、あたしは息を呑んで手で口を押さえた。

蹲つてあたしの両足首を掴んだ執事の顔がゆっくりと上がる。

切れ長の目が大きく見開かれ、その唇から血がボタボタ滴り落ちる。

「オ・レ・ヲ・モ・テ・ア・ソ・ビ・ヤ・ガ・ツテ・・・」

さつきまでの執事のテノールとは全く別人の声が、その唇から発せられた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8925z/>

靈幻彼氏

2011年12月31日21時53分発行